

異世界シェルジュ

ねこのしつぽ亭
営業日誌

3

AMANA KOUTA
天那光汰

主な登場人物 Main Characters

アラン

服飾屋を営む羊頭の青年。
貴族とも交流がある。

シャロン・ロブス

リュカの同級生。
やり手の貴族家のお嬢様。

シャンシャン

恭一郎の働くホテルの従業員。
狼の亞人。

ヒョウカ

恭一郎が身柄を引き取った
奴隸の少女。冷気を発したり
物を凍らせたりする力を持つ。

リュカ

「ねこのしっぽ亭」の常連客リュートの妹。
非常に賢くて勉強が得意。
大きな角と鱗のついたしっぽが生えている。

**サリア・キュリオシテ・アキタリア**

アキタリア皇国の第三皇女。商談の相手を探している

**佐藤恭一郎**

本作の主人公。あるきっかけで
異世界にトリップし、大衆食堂
「ねこのしっぽ亭」を手伝うこと
になった。

アイジャ・クルーエル

「ねこのしっぽ亭」の宿泊客。
爆乳エルフの魔法使いで、
酒にめっぽう強い。

メオ

「ねこのしっぽ亭」の店長。
ネコミミの少女。父から店を継い
だが、料理と計算は苦手。

1 ホテルグランドシャロンにようこと

「どうです、恭一郎様。お仕事にはもう慣れましたか？」

ホテルグランドシャロンの従業員が休憩する控え室。接客をしている表側とは違い、ごちゃごちゃと私物の置かれている部屋で、佐藤恭一郎は声を掛けられた。

「あ、セバスタンさん。いやあ、なんていうか。未だに慣れませんね。人に指導するつてのが、どうにも」

気恥ずかしそうに頬を搔きながら、恭一郎はセバスタンへと視線を向ける。

雄々しい一本の角を持つ金髪の端整な顔立ち。そしてその左右にある二頭の雄山羊の首が恭一郎を見つめていた。

「ふふ。慣れていただかなくては困りますよ。貴方は今や、このホテルのフロアチーフなのですからね」

悪魔。魔族とも亞人とも違う、魔界の住人。そんな妖しい種族の彼は、この職場で恭一郎が気軽に話せる数少ない上司の一人だ。

「はは、なんかすごいことになっちゃつたって感じですね。特に、女性の方とどう接すればいいのか」

目下の悩みは、部下である従業員との接し方である。このホテルのオーナーであるロップス家の令嬢シャロンにスカウトされ、ここ三ヶ月ほど従業員教育を任せってきた恭一郎だが、本当に信頼関係を築けているのかが不安であった。

「なんか、言うことは聞いてくれるんですけどね。こう、壁があるというか。……嫌われるんでしようか？」

二十三歳。特別、彼女たちよりも長く生きているわけではない恭一郎である。この異世界に来る前の経験はアルバイトが少しだけ。勿論^{もちろん}、部下を持つたことなど一度もない。「そんなことはないと思いますよ。むしろ……いえ、それはともかく、恭一郎様の指導は最先端ですからね。彼女たちも、少し困惑しているのでしょうか。これまでの経験が逆に枷^{かせ}になつているやもしれません」

セバスタンが言うには、彼女たちはこのホテルに来る前、若いながらも貴族や商家に仕えていたらしい。経験がある分、新しいやり方に慣れるのに時間がかかるついているのだろうとのことだつた。「その点では、ねこのしっぽ亭はやはり素晴らしいことでしょうね。メオ様にも、メイド長として来ていただきたいくらいですよ」

微笑むセバスタンに、それは無理な相談だと、恭一郎は笑いかける。ねこのしっぽ亭の店長であ

るメオは今、単身で店を守っている最中だ。セバスタンも心得ているのか、両肩の雄山羊の鼻を小さく鳴らす。

「さて、そろそろ始業時間ですね。今日は、ちょっと特別なお客様がいらっしゃるんですよ。急なお話だったので、色々と大変になるかと」

白い手袋をしっかりとめ直しながら、セバスタンは優雅にきびすを返した。恭一郎も、ちらりと鏡を見た後セバスタンを追いかける。

「へー。といっても、ここのお客様つて皆さん凄い方ばかりじゃないですか。どんな方が来るんです？」

こつこつと歩くセバスタンの横に並びながら、恭一郎はちょいちょいと襟^{えり}を正した。セバスタンの方をちらりと見て、少しづくわくした表情をのぞかせる。

そんな恭一郎を不思議な方だと思つて見つめながら、セバスタンはフロアへの扉を開いた。
「皇女様が、お見えになります」

◆ ◆

「あわわわわ、遅刻。遅刻するー!!」
走る。唯一の取り柄と言つてもいい自慢の足で大地を蹴る。

「せつかく！ せつかく就職できたのにー!!」

見えた。従業員用連絡口。急ぐ。あらん限りの力を振り絞る。そのままの勢いで扉を押し開いて、ロッカー室へ続く廊下を駆け抜けた。

「おはようございます！ 大丈夫です！」
「おはようございます！ そろそろ朝礼だぞー」

全然大丈夫じゃないものの、先輩のフェイさんに挨拶をして自分のロッカーをばかりと開けた。急げ急げと、支給されたメイド服に袖を通していく。ああもう、尻尾が引っかかる。

指で力チユーシャを確認して、自慢の狼耳をちよいと整えた。うん。今日もいい感じ。

「ひーー。急げ急げ！」

そうして、わたしは皆が待つフロアへと走っていった。



「えっと、皆いますかね……って、またですか」

恭一郎は、整列した部下達の顔を見渡して小さくため息をつく。ちらりと後ろを見やると、もはやお決まりとなつた狼耳がこそそと列に紛れ込もうとしているところだった。

「……シャンさん」

「はい！ いますっ！ いますっ！」

ぴょんぴょんと跳ね、後ろから右手を挙げたシャンシャンが、恭一郎に存在をアピールする。時間もないし、叱るのは後でいいか、と恭一郎はこめかみを指で押さえた。

「今日は、特に大事なお客様がお見えになります。詳しくはセバスタンさんが今からお話ししてくれます」

恭一郎が、隣に控えていたセバスタンに身体を向ける。マネージャーからのお話とあって、シャンシャン以外の全員が耳を澄ました。一人だけ尻尾の毛並みを気にしているシャンシャンを、恭一郎はため息をつきながら眺める。

「さて。急な話で申し訳ないのですが、今夜、皇女様がお見えになります」

にこやかに話しかめたセバスタンの言葉に、どよめきが起ころ。そんな周囲の反応に、どうしたんだろうという表情でシャンシャンが顔を上げた。

「本当は来訪先の邸宅にお泊まりになる予定だったらしいですが、我がホテルの噂を聞いて是非利用したいと仰つたそうです」

それを聞いた従業員の数名が、なんと迷惑など眉をひそめる。

「どうも一ヶ月ほど滞在されるみたいです。色々と大変ですが、皆さんで頑張りましょう」

そう言つてセバスタンは微笑んだが、従業員たちは不安そうな表情を浮かべる。一人が、手を挙げて口を開いた。

「すみません。どこの皇女様がお見えになるんですか？」

「おお、そうでしたとセバスタンが申し訳なさそうに額を叩く。わざとだらうなど、恭一郎はじとりと左肩の雄山羊おすやぎと目を合わせた。

「アキタリア皇国第三皇女、サリア様です」

メイド達の目が見開かれる中、シャンシャンは尻尾の枝毛を裂いてしまうか悩んでいた。



「アキタリア皇国は、ご存じの通り我等が国オスーディアとかつて戦をしました」

朝礼の後、控え室で今日の予定を確認していた恭一郎に、セバスタンが話しかけた。

「え、そうなんですか？」

そして、恭一郎の一言に珍しく言葉を詰まらせる。

「……ご存じない？」

「言われてみれば、初めて聞きました」

そんな馬鹿など、セバスタンは驚愕きょうがくの眼差しを恭一郎に向けた。

「いや、ですが。……恭一郎様はアイジヤ様と親しいですよね？」 大戦の英雄である『十傑じゅっけつ』が

側そばにおいて、気にならなかつたんですか？」

しつぽ亭に宿泊し続ける珍客。酒好きの爆乳エルフは、大戦期で最も武功を上げた魔法使いだ。戦場に舞い降りた乳神の名で知られる彼女が目の前の男性に好意を抱いていることを、セバスタンは当然把握している。

「あー、そうですね。なんていうか、別にアイジヤさんが話したくないならいいかなつて。知らなくとも、困るもんでもないです」

セバスタンの頭がふらりと揺れた。半端な上級魔法程度では微動だにしないはずのセバスタンがあまりのショックで思わず膝ひざをつきそうになる。

「ほんとに貴方あなたは。……ときおり、貴方の正体を本氣で探りたくなりますよ」

恭一郎が、いいじゃないですかとセバスタンに笑いかける。魔界で冥王とまで言われた悪魔は、目の前の丸耳のエルフにお手上げですとばかりに苦笑した。

「まあ、それが貴方のいいところなのですが。……今回ばかりはそろはいきません。最低限の知識は、持つておいていただかないと」 セバスタンが、にこりと笑う。うつと嫌そうな顔をする恭一郎だが、断れるはずもない。「人々、歴史のお勉強です」



「……つまり、アキタリア皇国は大戦中は敵国でしたけど、今は和解していくお互いに仲良くしようねって歩み寄っているつことですね」

「そう、ですね。一時間に及ぶ講義を五秒にまとめてくださってありがとうございます」

いやあ眠かったですとは言えず、恭一郎は照れくさそうに頬を搔いた。ただ、大筋の理解は間違つていなかつたようだ。条約だのなんだのは、もうすでに忘却の彼方だが。

「いや、ちゃんと聞いてましたよ。建前上は友好を目指していても、事実上敗戦したアキタリアはオスーディアに対して複雑な想いを抱いていて。ただ今晚お見えになるサリア様は、皇族の中でもオスーディアに対して特に好意的に外交をなさつてゐる方なんですよね」

復習する恭一郎の言葉に、セバスタンが少し安心したように頷く。要は、せっかく稳健に考えてくれている方のご機嫌を損ねるようなことがあつてはならない、ということだ。

「まあ、事前に深く考えても仕方ありませんよ。まずはお顔を見て、それから僕たちを好きになつてもらいましょう」

あくまでものほほんと構える恭一郎に、セバスタンは全くこの人はと肩をすくめた。あきれると同時に、妙な安心感を覚えてしまつたことに、セバスタンは自分でもわけが分からず苦笑する。

「細かいところはセバスタンさんに任せるとして。僕はまあ、いつも通り頑張りましようか」

正直、なるようにしかならないと恭一郎は伸びをした。不出来な自分にやれることは、いつも一つ。

◆ ◆ ◆

精一杯、頑張ることだけだ。

「アキタリア皇国のマナーは、こっちの貴族とほとんど一緒か。ありがたいな」

先ほどセバスタンに教えてもらつたことのメモを確認しながら、恭一郎は廊下を歩いていた。ただ、この仕事ばかりにかまけてもいられない。

ホテルグランドシャロン。客室数八十室を誇る七階建てのこの建物は、間違いなくこの世界における建築技術の粋^{すい}を集めた芸術品である。恭一郎は初めて外観を見たとき、建物を見上げるという久しぶりの感覚に懐かしさを覚えたものだ。

当然人気が出て、今現在も八割近くの部屋が埋まつてゐる。

「うわつと。す、すみません。つて、チーフじゃないですか」

メモに気を取られていたら、曲がり角から出てきた人影に危うくぶつかりそうになつてしまつた。おつといけないと、恭一郎は顔を上げて正面を見やる。

「あ、シャンさん。すみません。……つて、貴^{あなた}方また遅刻してたでしよう」

人影の顔を見た瞬間、恭一郎の眉が僅かに寄せられる。

「わふふー。あれは、ほら。ぎりぎりセーフじゃないですかー。点呼に間に合つたんで」

シャンシャンは恭一郎の表情を見るや、反省の色もなく恭一郎に笑いかける。尻尾をぶんぶんと振つてゐるところを見ると、むしろ寸前で間に合つたことを誉めてくださいと言つてゐるかのようだ。

叱る氣も失せて、恭一郎は目の前の狼耳少女を一息ついて見下ろした。

「犬の亞人だと、やっぱり足が速いんですね」

「犬じゃないです！」シャンシャンは銀狼です銀狼！」

恭一郎を見上げながら、シャンシャンは失礼など鼻の穴を膨らませた。胸を張り、誇り高き狼の志を見せつける。

「へえ。そうなんですか。……ちょっと格好いいですね」

話を聞いた恭一郎の瞳が、僅かながら興味深げなものに変わる。

シャンシャンは満足そうに頷いた後、恭一郎に自分の血統の素晴らしい話を話し始めた。

「わふふ。でしよう。我が一族はその昔、あの魔王軍隊長であつた銀狼王！」

「え？　すごいじゃないですか!?」

アイジヤによると、まだこの世界に人間がいた二千年以上も昔、人間と魔族は戦争をしていました。戦争は和平で終結するが、当時の魔王軍隊長の一人を祖先に持つのが、何を隠そうこのホテルのオーナーであるロップス家なのである。そのロップス家と同じ格の家の出ということは、実は目の前の少女はとんでもないお嬢様だったのかと、恭一郎は一瞬どきりとした。

「……の右腕であつた白狼王の側近であつた黒狼王を、陰ながら支えていたとされる赤狼王が、密かに憧れていたと言われる桃狼王の、伯父さんの隣の家に住んでいたと伝えられている由緒ある家系なのですよ!!」

「あ、この額縁曲がつてる。直しておこう」

こういう細かなところがしつかりしているかどうかで、ホテルの印象はがらりと変わる。危ない危ないと、恭一郎は一步下がつて額縁の角度を再度確かめた。

「うん。よしいい感じ」

「つて、ちゃんと話聞いてますか!?」
勿論ちゃんと聞いている。

「えーと、あと一回遅刻したら減給つて話でしたよね」

「ち、違いますよ！　何ですかそれ！　ひ、ひどすぎます！」

ぼそつと吐かれた恭一郎の呟きに、シャンシャンがぶんぶんと尻尾を振り乱して抗議する。ちらりと見た尻尾は綺麗な銀色をしていて、見た目だけならば確かに銀狼王の末裔と言わっても違和感はない。

「ま、冗談は置いといて。シャンさんは何でここで働いているんです？」

「それ、地味にひどくないですか？　チーフ、わたしにだけ容赦がなさすぎます」
遺憾ですと頬を膨らませる狼少女を、恭一郎はじつと見つめる。

自分でも、まあひどい言いぐさだとは思う。が、こここの従業員はセバスタンが各地から引き抜いてきた精銳達である。実際、新しい体制に戸惑いは見受けられるものの、皆の仕事ぶりは優秀の一言であった。……一人を除いて。

「わたしは、前の旦那様のおかげでここにいるんですよ」

かすかに俯いたシャンシャンに、つい恭一郎の目が留まる。

「もう亡くなられましたけど、いい旦那様でした。本当に、可愛がってもらつて。……亡くなる前に、この職場に口添えしていただいたんです」

なるほどと、恭一郎は得心がいった。ロブス家の誰かと親交のあつた以前の主人が、シャンシャンのこれから的生活を思い、ホテルの仕事を斡旋したのだろう。

「だつたら、遅刻しちゃダメですよ。……今回までは、大目に見てあげます」

寂しそうに肩を落とすシャンシャンの頭を、恭一郎は優しくこつんと叩いた。

「……え？　ほ、ほんとですか？」

驚いたように、シャンシャンが恭一郎の顔を見上げる。ぱあと、一気に表情が華やいだ。

「あ、ありがとうございます！　わたし、勘違いしてました！　チーフはてつきり、血も涙もない冷血漢だとばかり！　いやあ、あるもんですね。人には一抹の優しさが！」

「……次遅刻したら、一ヶ月まかない抜きで」

がびんど、シャンシャンの毛が逆立つ。こつこつと先を行く恭一郎にすがりつくように、シャン

シャンは待つてくださいと声を上げた。

「ひ、ひどいです！　ご飯を唯一の楽しみに、シャンシャン頑張つてるというのに！」

後ろからスースの裾^{すそ}を引っ張つてくるシャンシャンを無視しながら、恭一郎は自分も甘いなあと反省する。どうも、自分には厳しく指導するというのがしつくりこない。

ただ、先ほどのシャンシャンの顔が、あのネコミミ少女のいつかの表情を思い出させて……。恭一郎は次の仕事へ取りかかろうと、ゆっくりと足を運んだ。



『せっかく皇女様が来てくださるのであるから、皆さんでお出迎えしましよう』

チーフがそう言ったのが夕方頃で、今私たちはサリア様を出迎えるためにホテルのロビーに並んでいる。勿論全員ではないけど、手を空けられるものは皆集まっていた。

「何も派手な歓迎は必要ありません。いつも通り、礼儀正しくお願ひしますね」

フェイさんも皆も、緊張した面もちでサリア様が来るのを待っている。わたしとしては、それよりもあるアキタリアの皇女さまがどんなお顔なのか楽しみだという気持ちの方が強い。

「……シャン、あんたね。皇女様がお見えになるのよ。欠伸くらいは我慢しなさいよ」

「わふう。そっは言つても。夕ご飯食べたから眠いですよー」

隣に立つフェイさんが、呆れたような顔で見下ろしてくる。いい先輩だが、美人なのと胸が大きいのが大変妬ましい。背は、わたしくらいのちょっと低めのほうが可愛いはずだ。

「まったく。相変わらずね、シャンは」

蛇で出来た髪をうねうねと動かしながら、フェイさんはそわそわと立ち位置を細かにずらしていく。どうも、今ひとつ足の置き場が決まりないらしい。

そんなに緊張することなのかなあと、わたしは尻尾の毛並みを確認した。うん。世界で一番もふもふだ。

「あ。き、来たみたいよ」

フェイさんが姿勢を正し、皆が一斉に声を静めた。

その瞬間、私は大変なことに気づく。

え、枝毛が。枝毛がこんなところにも！



「これはこれは、サリア様。ようこそおいでくださいました」

ホテルのエントランスが開き、セバスタンが恭しく礼をした。

こつと床に足音が響き、凛とした声がロビー全体に響きわたる。

「出迎えご苦労。妾がアキタリア皇國第三皇女、サリアじゃ。よろしく頼む」

深い深い、緑色の瞳。地面についてしまいそうなほど長いブロンドを揺らして、サリアはセバスタンの一步前へと進み出た。

「私は当ホテルマネージャーの、セバスタンと申します。長旅、お疲れさまでした」

「よいよい。かたつ苦しい挨拶はなしじゃ。はよう部屋に案内してくれやれ」

そう言うとサリアは、手を組んで上にあげた。んうーと、気持ちよさそうに伸びをする。イメージと随分違うなど、恭一郎は唇に手を当てた。

「サリア様、皆が呆気に取られています。せめて人前では、もう少しお淑やかに」

「ふん、うるさいわ。どうせすぐボロが出るんじや。最初から見せておつた方が、むしろいいというものよ」

サリアの隣に立つ長身の男が、困ったように顔をしかめる。美貌から見るに、エルフであろう。短髪ながら、サリアに劣らず驚くほど美しいブロンドだ。緑色のローブを羽織っているが、その内側からは革製の防具がちらりと見えていた。サリアのお目付役兼、ボディーガードと言つたところだろうか。

「えつと、お荷物は……二人分でしようか？」

サリアから放り投げられたケースを受け取つたメイドが、不思議そうに首を傾げる。一国の皇女

の外交訪問だ。警護役だけでも、十人はつけるのが常識のはず。しかし、辺りを見渡しても、隣の

エルフ以外は連れていなかった。

「うむ。本来ならば、一人でゆっくりと旅をしたいくらいじや」

「このジェラードの目が青いうちは、もう二度と抜け出しなぞさせませんからね」

かかかと笑うサリアの話の腰を、ジェラードが即座に折っていく。サリアの顔が不機嫌そうに歪ゆがみ、しかしジェラードはあえて気にせずセバスタンに頭を下げた。

「従者のジェラードです。主がなにかと迷惑をかけると思いますが、お願ひします」

「いえいえ。ごゆっくりおくつろぎください。夕飯も、すぐ用意させましょう」

見たところ、ジェラードはお転婆てんぱなお姫様に振り回される苦労人といった感じだ。恭一郎はメイドからケースを受け取ると、こちらへどうぞとサリア達を案内する。

「最上階が、スイートルームフロアになつております。サリア様とジェラード様には、そちらで過ごしていただこうと……」

「ほう！ 部屋に階級があるのかえ!? おもしろいのう!!」

サリアを先導しようとした恭一郎に、後ろから樂しげな声がかけられる。

「はい。当ホテル自慢のスイートフロアは、七階全てが一つの部屋になつております。調度品、家具、その他の小物に至るまでサリア様にもご満足いただける品であると自負しております」

「ほうほう！ それはすごいな！」

「……え？」

はしゃぐサリアに微笑みながら、恭一郎は階段を上ろうと足をかけた。

「じゃが、やめじや！ 七階など、面倒くさくてかなわんわ。二階にしてくれ。何なら、この階の床に寝てもよいぞ」

「……え？」

思わず振り返ると、サリアは手を振つて恭一郎に笑いかけた。セバスタンも、驚いた表情でサリアを見つめる。

ここオステディアでは、身分の高い人ほど上の階層に私室を作るものだ。事実、王族は城の最上階に私室を設け、成金はこぞつて高い家を建てる。それは、アキタリアでも同じはずだが。

「サリア様、いい加減に……」

「前から思つておつたのよ。何故にわざわざ階段を上らねばならんのじや。下の方が便利に決まっておろうが。体力の無駄じや。この床がダメなら二階してくれ」

えつと、と恭一郎はセバスタンを見つめる。

セバスタンは逡巡しゆんじゆんした後、貴方あなたに任せますと恭一郎に視線を送つた。

ふむと考えた後、恭一郎はサリアに提案する。

「……サリア様。すみませんが、本日は二階が埋まつております。明日になれば二階のフロアを貸し切りに出来ますので、今晚だけ六階でご容赦ようしゃいただけないでしょうか？」

この言葉は事実だ。サリアの従者が何人か分からなかつたので、急遽本日宿泊予定のお客様を

五階以下のフロアに詰め込んで、六階部分を丸々空けていたのだつた。

「……ふむ。まあ、それならば仕方ないか。よい、案内せい」

サリアの言葉に、恭一郎はほつと胸を撫で下ろす。セバスタンも、同じような心境でジエラードの方へ確認を取つた。

「いえ、こちらこそ。わざわざスイートを用意していただいたのに。……サリア様、今回は彼らのご厚意に甘えますか……」

「あーもう！ うるさいうるさいうるさい !! 分かつとるわ！」

さつさと「行くぞと、サリアは恭一郎の背中をぐいと押した。予期せぬ力に恭一郎の足が少しふらつく。

「サリア様!!」

「あーもう !! いいじやろ別に!!」

シャロンと初めて会つたときに学んだことだが、この世界だと身分の高い女性は男性にほとんど触れない。ましてや、自ら男性の背中を押すなどあり得ないことだつた。

どうやら、せつかく勉強したマナーはあまり役に立つそうにない。恭一郎は苦笑しつつ階段を上つた。



アキタリア皇国。大陸を同じくし、オステディアのほぼ真東に位置するこの国は、オステディアとは全く別の発展を遂げた大国だ。

オステディアは魔法と剣の軍隊を保有し、豊富な水源と肥沃な土地に恵まれたおかげで畜産と農業が盛んであるが、アキタリアの資源は一言でいえば森である。

国のはば八割を森林に覆われているアキタリアは、森に棲む精霊と妖精の加護のもと、その森の恩恵を最大限受けて発展してきた。

魔法とは異なる技術体系の『法術』と呼ばれる精霊術式は、生まれながらにして精霊と共にあるアキタリアの民にしか使うことが出来ない。そもそも他国の者は、あの森の中でアキタリアの民ほどの生活を営むことすら難しいだろう。

そんな偉大なる皇国の皇女様が、スイートから比べれば簡素なベッドの上で飛び跳ねていた。

「うーむ、ちょっと上質かのう。なんかこう、板の上に直接ボロ布を敷いたような部屋はないかえ？」

「い、いえ。すみません。さすがにそこまでの部屋はご用意がなく……」

恭一郎は、もはや止める気も失せたとばかりに肩間を押さえるジェラードの横で、苦笑しつつサリアを見つめていた。

ここは高級ホテル。最低ランクの部屋でもそれなりの広さがあり、内装もしつば亭とはかけ離れ

ているレベルである。

せつかくのサリアの召し物は、ベッドの上で暴れたためにすっかり乱れてしまっていた。サリアはそれを見て、ええい邪魔じやと腰布をまき上げる。足を丸出しにして、快適じやーとベッドに大の字で倒れ込んだ。

「サリア様!! 皆さんいるのですよ!! はしたない!!」

「あー、いいじやろ。別に裸だということもない。よいよい。ほれ、見たかつたらお主も見てもいいぞ?」

ペラリと裾をめくつてサリアがにやりと笑つた。

エルフ耳の先まで赤く染まつたジエラードが、つかつかとサリアに近づいていく。彼が赤くなっているのは、勿論怒つているからだ。

サリアとジエラードの口論を背中に聞きながら、恭一郎とセバスタンは手を後ろに組んで壁の方を向いている。

冤罪怖い、冤罪怖いと呟きながら、恭一郎はいつ部屋を出ていくべきか悩んでしまうのだつた。



「へえ、皇女様が。……にしても、変わった人ですねえ」

ぎゅつぎゅつと恭一郎の背中を踏みながら、メオが間の抜けた声を出した。耳と尻尾をふりふりと動かして、加減しながら恭一郎の筋肉を踏みほぐしていく。メオの足の先が気持ちいいところに入り、恭一郎の口から声が上がつた。

「あー、そこです。ま、まあ。悪い人ではないみたいですし。もともと変わり者つて噂には聞いてたんですけど、まさかあそこまでお転婆だとは」

ふうーと息を吐きながら、恭一郎は一日の疲れも一緒に出していく。最近、マッサージのありがたみが身にしみる恭一郎である。

「メオさんの方も 変わりはありませんか?」

「そうですね、順調ですよ。恭さんがいない日は、夜営業もありませんし。むしろ暇な時間が増えて。……趣味でも作ろうかなあ」

うーんと考え込むメオに、恭一郎はくすりと笑う。今まで、ずっと働き詰めだったのだ。何か新しいことや、好きなことをするのがいいだろう。

「刺繡とかどうです?」

「あー、そうですねえ。……でも、アランさんに見られたらちよつと……つて思っちゃうんですねよ」

にやはははと遠い目をするメオに、恭一郎はなるほどと苦笑した。アランは貴族相手にも商売をする服飾屋だ。身近にその道のプロがいると、なんとなくやりづらい気持ちは分からぬもない。

それに、アランに頼めば、簡単なものなら店で雑談しながらひょいと作ってくれるのだから、わざわざ自分で手間暇かけなくてもいいか、とも思う。

「そ、そのお。本来ならあ。こんなこと考える暇もないくらい、忙しい年頃なんですけどねー」軽く咳払いをして、メオは少し頬を染めながら足元の恭一郎に視線を送る。勿論その視線には気づかずに、恭一郎は申し訳なさそうに頬を搔いた。

「すみません。まだちょっと手が放せなくて。少なくとも皇女様がいる間は、向こうにいることになりそうです。でも、その後ならしつぽ亭を手伝う時間を増やせると思いますよ」

「え？ あ、あー、しつぽ亭。そうですね。はい。そうですよね。……ふん！」めきりと、メオの足が恭一郎の背中に突き刺さった。

「んひやいつ!!」

二つの月の明かりの下、今やお決まりになつた恭一郎の悲鳴が、夜空に吸い込まれていった。



「あ、ジェラードさん。こんにちは。部屋はどうでしたか？」

二階へ続く階段を上りきると、恭一郎は疲れ切つた顔をしたエルフに出くわした。恭一郎を見るや、ジェラードは姿勢を正してにこやかに笑いかける。

「ええ、よく眠れました。すみません。わざわざ階を移動してもらつて」

申し訳なさそうにするジェラードに、恭一郎は大丈夫ですよと笑顔を作る。

今朝、貸し切り状態にした二階にサリアとジェラードの部屋を移した。二階には二十部屋ほどの客室があるが、今はまだ互いに一部屋ずつ使つてているだけだろう。

「二階は全て貸し切りにしているので、他の部屋もどうぞご自由に使つてくださいね」

一步前を歩く恭一郎に、ジェラードが恥ずかしそうに耳を搔いた。すぐにサリア様が使い尽くすと思います、とジェラードに言われ、恭一郎はまあそういうなと思いつつ、愛想良く相づちを打つた。

「サリア様、入りますよ」

ジェラードがノックをし、部屋番号の書かれた扉をぎいと開ける。

本来なら恭一郎の役目だが、サリアの部屋に限つては、ジェラードに開けてもらつたほうがいいだろう。ジェラードが部屋に踏み込んだのを確認して、恭一郎も一步遅れて部屋へと入つていった。「わふううううう。美味しいですうううう。シャンシャン、こんな美味しいもの初めて食べましたあああああ」

視界がふらりとして、危うく、恭一郎は床に頭をぶつけそうになつてしまふ。頭の中の血液がどこか別のところへ移動していくのが分かつた。

「ははは！ じやろう？ アキタリアの蟲蜜むしあつは世界一よ！ ほれ、もつと食えい」

「甘いですううう。すつぐく甘いですううううう!!」

サリアが豪快に笑い、シャンシャンが涙を流しながら口をもごもごと動かしていた。どうやら、サリアに何かお菓子を貰っているらしい。

「シャンさあああん。何で貴方がここにいるんですかああ？」

サリアへの挨拶も忘れ、恭一郎はがしいとシャンシャンの頭を鷺掴みにした。後ろでジエラード

が、仲間を見るような温かな視線で恭一郎を見守る。

「わわわ、チーフ!? ……どうしたんですか？ 怖い顔して」

突如現れた恭一郎に、シャンシャンがびっくりしたように振り返った。もごもごと動かす口はそのままに、きよどんとした顔で恭一郎を見つめる。

「どうもこうも。何で、サリア様と貴方が親しそうに会話してて、あまつきえサリア様のおやつを貴方が食べてたんですかあ？」

「おぶぶぶつ。ほ、ほっぺたは止めてください。飴が、飴が入ってるんでっ」

恭一郎に両手で頬を挟まれ、シャンシャンが目を白黒させる。

どうも、サリアからもらつたのは飴玉だつたらしい。確か、この世界での砂糖は超高級品のはずだ。恭一郎は顔を青くして、思わずシャンシャンを掴む手に力を入れてしまう。

「あぶぶぶぶつ！ そ、それに二階はシャンシャンの担当ですよ。いるのは当たり前ですう」

シャンシャンが必死に出っ張った唇を動かした。

しまつたと、恭一郎は自分のうかつさを呪う。確かに、二階の担当はシャンシャンが所属する班だ。班長がしつかりしている子だから、すつかり安心しきつっていた。

「はははははっ！ よいよい。妾が呼んだのじや、許してやれ」

問いつめられるシャンシャンを見ながら、サリアが腹を抱えて笑い声を上げる。

はつと我に返つた恭一郎が、申し訳ありませんとサリアの方に向き直つた。

「おもしろいのー、主ら。じゃが、妾が招いたのは本当じや。暇だつたんでの。そう責めんでやつてくれ」

サリアはそう言うと、もふもふとしたシャンシャンの尻尾を撫で上げていく。わふうと、シャンシャンが気持ちよさそうに顔を惚けさせた。

「ですが、飴玉までいただいて。かなり高価でしょう？」

「ん、あー大丈夫じや。貴重ではあるが、砂糖ほどではない。ほれ、主にもやろう」

ぽいとサリアの右手から放られた飴玉を、恭一郎は慌ててキャッチする。見ると、黄金色の球体が手の中に収まつていた。すんと、甘い蜜の匂いが鼻腔をくすぐる。

「これは……蟲蜜ですか？」

「そうじや。アキタリア名物、蟲蜜飴よ。ほれ、はよう食え」

にこにこと笑うサリアを見て、恭一郎も飴玉を口に運んだ。ここまで言われたら、食べないのは逆に失礼というものだろう。

「あ、美味しい。……すごいですね。なんと言うか、蟲蜜の風味がすごく豊かです」

「ほう。分かるかえ。そうよ、この風味は我が國のもの以外では味わえぬというものよ」
ころころと口の中を移動する飴玉は、濃密でねつとりとした甘さだった。砂糖の純な甘みではない。豊かな風味を持つ、蟲蜜独特の複雑な味わいだ。

「しかし。これ、蟲蜜だけなんですか？ 確か、蟲蜜だけで飴玉を作るのは難しかったと思うんですけど」

「おお、よく知つておるな。これは蜜飴蜂というアキタリアの固有種でな。こやつらは、蜜をこのように飴玉状にして集める性質を持つておる」

「へえーと感心しながら、恭一郎は口の中の甘味を味わう。流石は異世界。まだまだ自分が知らない、面白い食材もたくさんあるのだろう。エルダニアの市場にあるのは、どこか見たことのあるような食材ばかりだったので、実は全くの未知の食べ物で感激するのは少ない恭一郎であった。
「なんとか大量に養蜂して、飴玉を名産として輸出したいのじやがのー。これがなかなか上手いくかんでな」

悩みどころよど、サリアは腕を組む。

確かに、大量生産するとなると設備や管理など色々と問題はあるのだろう。自然のものというのは、本当に扱いが難しい。

「そういうえば、サリア様はどのような御用事でエルダニアに？」

差し出がましいとは思つたが、つい気になつて恭一郎はサリアに質問した。予定を聞いておけば、今後何か役に立てるかもしれない。

「まあ、簡単に言うと商売相手を探しにじやなー。こちらの貴族と会つて色々と話ををする予定じや」
サリアがめんどくさそうに話すのを聞いて、恭一郎も得心する。半ば公務で、サリアはこのエルダニアとのパイプを作りに来ているのだ。

一見我が家^{まほ}なだけのお姫様だが、その実やはり真剣に国のことを考えているのだなど、恭一郎は尊敬の眼差しでサリアを見つめる。親オスティア派であるが故に、本国に帰れば色々と面倒なことも多いのだろう。恭一郎は、目の前の少女に改めて姿勢を正した。

「あああ！ なくなつてしまましたあ！」
心底悲しそうな表情をするシャンシャンを見つめながら、恭一郎はころころと口の中の飴玉を転がすのだった。

◆ ◆

「え？ サリア様との会食ですか」

何も異常がないかとロビーを見回っていた恭一郎は、セバスタンから声をかけられ、そのままロビーのソファに腰掛けていた客のところまで案内された。